

遠地輝武『夢と白骨との接吻』

遠地輝武の詩集『夢と白骨との接吻』、この奇妙な名の詩集について著者自身がかいた一文『本の手帖』処女詩集特集。一九六一年）があり、それによるとその発行は一九二五年（大正一四）であった。

遠地輝武は本名木村重夫、画家を志望して姫路中学校を経て上京、日本美術学校に学び、数冊の詩集の他、詩と美術についての評論活動があり、著作もある。その詩は詩集『ダイスト新吉の詩』の影響からはじまることを次のように書いている。

「一九二三年春にはじまった女とのただれた性生活の中で、女がどこからか高橋新吉のダダの詩集を見つけてきた。読むと限りなくおもしろかった。何だ、こんなことならおれにもかけるぞという気もする。日記がわりにダダの生活記録を書いた。」

と語っている。しかしこれは、詩のことは高橋新吉の『ダイスト新吉の詩』あたりからつよい影響を受けたが、このときすでにそれを描けば、すぐダダの詩になるような、女とのダダ的な生活があったといっているのであった。

大正末期のある時期、遠地輝武がダダの詩人であったことは、この詩集の存在がよくそれを

俺には中心がない
宗教もない
信仰もない

変態性欲で・無性欲で・中性で・色情狂……
社会主義だ

矛盾を色調として流動し・噴火し・爆発するんだ
つまり・色魔で・酔払ひで・嘘つきで・
そして

千春とは彼の一人娘、遠地輝武が一九六七年の七月十四日に死亡した告別式通知者の「女・千春」、そして現住所不明のまま、告別式にも姿を見せなかった千春その人である。不貞のひととなった彼の最初の妻が、数え年二歳の娘を連れて去ったことは、ながくこの著者を苦しめて、この詩集のニヒリスティックな叫喚のどこかにその悲痛がきこえる。

私の幻想はズバリ切れました

千春が二歳・私は二五・あなたが二一歳です。
それで――
ホラ……ホラ……あの爆発！

同時にまた、自ら「ダダの生活」と自嘲的にその時期を呼ぶ個人的な理由も彼にはあった。「一九二五・二……冬に拵がる執念」という詩にそれははっきりと見出されよう。

証明するものであるが、その彼のダダは生きることへの根ぶかい混沌と不安から発して、社会的に公認されている秩序や道徳、あるいは人生の意義や価値観というものを否定させるところから発して、彼自身をも途方にくれさせるものであったのではないか、というような印象も与える。事実彼はすぐにその境地から脱出して、アナキズムとマルキシズムとの間を思想彷徨し、やがてプロレタリア文学の中に身を投じて、その詩運動に推進者経営者の足跡をのこした。思うにダダにとりつかれたその間に、従来の価値観を自分の中で否定するに至り、その行きつくところが左翼であった、というこの時期の風潮に適したのであらう。

詩集『夢と白骨との接吻』は彼の初期のダダ的記念物であり、高橋新吉から萩原恭次郎に至る大正末期の時代的なニヒルの情況を反映している。芸術革命的な否定的な動向の時期の一産物として記憶にのこる一冊である。

当時の検閲者はなぜこれを、いくらか泣き言めいたこのダダの詩集を、発禁処分にしたのだろうか。詩集の中にあちこちと出てくる首、死、白骨、爆発、接吻、性欲、色情狂、姦通、コシマキ、強姦、淫売、変態、共産等の言葉がいけなかったのだといえ、あるいはそうであったかもしれないという気もする。これは風俗壊乱であり、それを通して反抗と反道徳が渦まいているのが見えるからだ。忠君愛国が国民道徳のタテ糸となつてがっちり存在し、その旧道徳が民衆を完全に支配した時代である。反道徳は反国家に他ならず、それは被治者民衆の反逆の精神に直通する性格をひそめている。そういう目で眺めたら『夢と白骨との接吻』なんてとんでもない書名である。

あるいはこの詩集は書名そのものが発禁の直接の理由であつたかもしれない。これほど、さしたる意味もない言葉でありながら反道徳でいやらしく不安な気分を醸もす書名もめずらしい。

その詩的内容の不確実さ、思いつきばったりの言葉の羅列などのことを別とすれば、タテヨコ自在勝手な活字の組み方、大小の活字の交錯、詩の題もはつきりしていないような気随気ままな形式の無視等に至つては、六カ月後に出た萩原恭次郎の第一詩集『死刑宣告』をものぐ

ほどの奇抜さであつた。

大正期末、多くの若い詩人たちは、足並をそろえるように、詩の形式の無視と虐待、軽蔑と破壊等々のかぎりをつくしているように見えたが、その底には新しい詩精神の模索がうずまいていた。後にこの者たちのなかからプロレタリア詩人の輩出を見たのであるが、遠地輝武は最後までプロレタリア詩運動の忠実なたらし手となつた。彼のはげしく自己否定的なダダ詩と教条主義的といつてもいいほどの左翼文学理論の信奉とが、必然的な連結として彼において体现されたことに、私はおどろき刮目するものである。

第一次世界戦争、ロシア革命、米騒動、社会主義、労働者の階級意識の目ざめ、関東大震災——その災害・動乱と朝鮮人・社会主義者の大量虐殺という暗然たる事件と不安の時期が生み出した詩集という意味で、高橋新吉の詩にはないものをバックとして、そしてずっと徹底的であつたというべきものであつた。社会不安を人生の青春の挫折に重ねた見本の一つである。

内野健児『土牆に描く』

朝鮮詩集『土牆に描く』の著者内野健児は、後昭和に入つてのプロレタリア詩人新井徹であ

る。広島高等師範学校時代から川路柳虹主宰の『炬火』『現代詩歌』等に加わり、南朝鮮（現韓国）大田の中学校教師のかたわら発行した同人誌『耕人』は、当時朝鮮で第一の詩歌雑誌として広く内外の若い詩人たちに存在を知られた。その彼の第一詩集として『土牆に描く』が出たのは昭和十二年十月、関東大震災のとき日本内地で朝鮮人が多数殺され、朝鮮での治安に不安を感じて敏感になりすぎていた日本官憲の忌諱にふれたのは止む得ないことであったかもしれない。たとえば「闇の曲」という詩のはじめは次のようだ。

はばまれる呪いよ！

ああ すべての樹木が

あの小さい野辺のペンペン草までも、

のびのびと手を遙かにさしあげて、

琥珀に澄んだ日光の美酒のしたたりを

うけとるのを見る――

だのに

重い石が上にかざされ

生き生きとした樹枝や茎もはばまれ抑えられて、

日光や大空のめぐみに酔い得ない
草木の悩みがわれわれの悩みではないだろうか。

またその中に次のやうに暗く、はげしい詩句も目につく。

呪いだ！

呪いは遂に呪いだ！

呪の炎よ、のぼれ

ああわれらの蒼ざめた体軀からは、

麗わしい紅蓮の炎はのぼるまい

だが、濁流のように奔騰する炎よ

竜巻のようにのぼって

紅蓮の炎で焼くより醜く

地上を焼け、天を焼け

よろづのものを焼きつくせ

彼が詩人の感受性から、思想としてよりも常日頃の生活のなかで、その時期の朝鮮統治に、人間的な不安と怒りを感じたことは当然のヒューマニズムであり、昭和初期に上京して左翼詩人として活動したことも、この時の感動のナイーヴな成長であった。

内野健児―新井徹、彼は大正昭和の自由詩の時代における健康な詩人の一典型と目すべき人である。

健康とは、成長と前進を未来に予約できるということである。『土牆に描く』のなかの詩篇は、手法的にも思想的にも、詩的抑揚が弱すぎるくらいだが、

「殺風景な山々、それに平地には草枯れて河は瘦せ――そしてこの天地に冷い影をひいて運命そのもののように歩む白衣の人びと――又この天地に移り住んでいる内地人は、いつしかうるわしい人性の心泉を涸渇させた者ばかり」

(跋)

と書いた、この幼いばかりの感動を推しすすめて、やがて「プロレタリア詩人会」の創設に加わり、ナップに参加し、その解散後は『詩精神』を主宰して、若い詩人たちを育てつつ、社会主義リアリズムに努力を傾けるに至った一途な生き方を貫いたのである。大正末期におけるもつともアンチ・ヒューマンな『夢と白骨との接吻』の著者遠地輝武ともつともヒューマンな発

禁詩集『土牆に描く』の内野健児が、協力してナップ解散後のプロレタリア詩運動を維持したという事実は、今はるかに眺めてほえましい。プロレタリア詩運動における二つの流れの、因って来たる姿をここに私は見るのである。

『土牆に描く』の詩は、当時詩壇の中心だった民衆詩派的手法と、いささかのセンチメンタルをもつて、植民地朝鮮に対する日本の非人道的な統治にたいする若い良心の痛みをうたったものである。

この詩集が治安妨害の故をもって発売禁止され、その著者としてやがて朝鮮での教職者としての地位を追われたのであった。関東大震災のおびただしい朝鮮人ごろしにたいする精神的な恐怖が、朝鮮におけるこのヒューマニズムを弾圧せしめたのである。そのことから一人のプロレタリア詩人を生み、その後の左翼文学の活動に実質ある努力を強いたことに、戦前、昭和の日本の姿を逆投影するものがあつたように思われる。禁止された第一詩集『土牆に描く』の他に『カチ』『南京虫』などの詩集があり、波のプロレタリア詩人としての歩みは健実なりアリズムの道を行ったもので「アルメニアの兄弟」「弟よ」「入宮万歳」等の作品が代表作といわれている。

川路柳虹門下の詩人として、平戸廉吉の未来派、萩原恭次郎のアナキズムと並んで、内野健児のプロレタリア詩運動参加とその活動は異彩を放っている。一九四〇年（昭和十五）彼は長期検束留置の疲労から病み、四十六歳で死んだ。夫人が同じくプロレタリア詩人として活動した

後藤郁子であったことも知られている。

中浜哲『黒パン党宣言』

日本読書新聞に連載で発禁詩集が紹介されたとき、中浜哲の『黒パン』が取上げられていたが、二つの理由でそうでない方が良かったと思う。というのは『黒パン』は詩集ではないからである。『黒パン』は雑誌の特集である。大正十四年十二月に、大阪から出ていたアナキストの雑誌『祖国と自由』の一冊を中浜哲著作の特集としたもので、中浜はすでに死刑を宣告されて、上訴せず死の時を待っていた時期であったが、その彼が獄中でかいた詩、対話、回想などを集めたものである。予定ではこれを第一集とし、第二、第三が計画されていたのである。であるからこの『黒パン』第一集を発禁詩集にかぞえることはいささか行きすぎで、『発禁詩集』の頭数をそろえるための所作のようにも見える。

むしろそれよりも、彼には二つの詩集がある。『中浜哲遺稿集』と『黒パン党宣言』、ともにガリ版で、前者は名古屋で、後者は東京で昭和七年に刊行、このうち『黒パン党宣言』は発禁となった。『中浜哲遺稿集』も発禁になる方が当時としてはあたりまえ、といったくなるものだが、これは五十部しかつくられなかったというから、検閲の目に遭遇せず、発禁の命令外に

置かれたのかもしれない。そして中浜哲の詩として知られる「杉よ！ 眼の男よ！」もここに収録され、中浜の詩を知るにはもっとも好都合のものだが、現存するものはほとんど無いようである。

『黒パン党宣言』は菊版四分ノ一くらいの小形のもので、詩も「黒パン党宣言」と長詩「黒表」の二篇だけの収録にとどまった。「黒パン党宣言」という詩は中浜著作集のなかの詩「黒パン党戦言」をそのまま採り、表題を戦言から宣言としただけのようである。（それは多分検閲にたいする考慮からであらう。）

黒パン党宣言

（御代泰平の××××、獄中にて）

——一九二五、一〇、三一

其他に何も言うことはねえ！

罰饅か？

麵麴か？

俺達は俺達だア！

俺達はこれでも二足獣のハシクレだア！
俺達は『黒パン』製造所の職工だア！

これが今の社会の滋養になろうが成るまいがそんな事は俺達の知ったこっちゃねえ！
だが

プロレタリアには持って来いの食物だア！

特殊の膨脹薬……………五%

蒸溜水……………一五%

パン粉……………八〇%

念の爲め、右に原料の化学的成分を明示して置く――

唯、咀嚼が足らぬと不消化を起して屹度下痢するぞ！

又、独特の味が湧いて来るア！

根気好く 咬み締めて見ろ！

一見、無臭無味であるが

俺達の手でデカに捏ねて、俺達の手でデカに焼いて出来上った物なのだア！

この『黒パン』は外国製の物ではねえ！

俺達は『黒パン』製造所の職工だア！

俺達はこれでも二足獣のハシクレだア！

俺達は俺達だア！

プロレタリアに持って来いの食物、パン、否、黒パンとは爆裂弾のことである。だから「俺達は『黒パン』製造の職工だ」というのである。この『黒パン』は外国製の物ではねえ！というところには、ある自負、当時ひそかにロシアから援助を得ていた国内のボルシェヴィキとの対立抗争の思いがあったのである。だから「黒パン党宣言」が「黒パン党戦言」であったわけだ。

中浜哲は福岡県企救郡東郷村字柄杓田（現・北九州市門司区字柄杓田）に生れ、大正十五年四月十五日大阪若松監獄内で刑死した。二十九歳。本名富岡誓、中浜哲の他浜哲、浜鉄、あるいは富岡誠などのペンネームを用いたこともある。加藤一夫らの自由人連盟から出て、『祖国と自由』『原始』『文芸戦線』などに詩、評論の他自伝風の小説もかいている。

『黒パン党宣言』は昭和七年に神谷暢らの溪文社（東京・世田ヶ谷・赤堤）から出て、発禁のためにこれまた現存するものが見られないといってもいい。私も戦後十数年の間珍重してい

たが、行方不明になってしまい、菊半截のさらに二分ノ一くらいの、小さい、横とじの姿が眼底かすかに残っているばかりである。

中浜哲の著作としては、前記『自由と祖国』の特集「黒パン」と並んで重要な『中浜哲遺稿集』も現存するものが明らかでないが、これは筆写したものが手許にある。元本は美濃版型のガリ版冊子、十七篇の詩と二十首ばかりの短歌があり、巻頭には「弥生空ギロチン高く霞み行く、黒蝶我は散る花に舞ふ」という辞世がある。

最後に中浜哲の詩についての感想を述べておきたい。

中浜は大正十五年四月に処刑されたのだから、そして彼が多くのものをかいたのはそれまでの二ケ年の獄中であつたから、その詩の手法も亦、いわゆる第一次世界戦争と関東大震災の影響下に、芸術アバンギャルドの運動が表面化した、大正末期の詩人であつた。中でもテロリストとしての活動のかたわら、未消化な手法に爆発する感情を託した彼の詩は、従来文学史的に評価されていないが、あの大正末のアバンギャルド芸術活動の中にその存在を記さねばならない人である。

「赤と黒」の運動に刺激されたのではないかと、彼の詩の方法と精神とについて、かねてその疑問を積極的に肯定してきたのも、中浜が残した詩の、八方やぶれの表現にたいする私の評価であつた。彼は多彩な試みをしているが、活字の大小、行の倒錯、間投詞の氾濫、主観の暴

発など、ダダの流儀そのものである。

高橋新吉、『赤と黒』の人々、『ダムダム』に集団した詩人たち、その他大勢、一方には如何に生きるかの問題を抱え、他方に既存芸術の否定と破壊を叫んで、しかも具体的には否定することにのみ方法と目的を見出すしかなかった「ダダ」の帰趨の時期に遭遇した中浜が自分の詩を書くことができたのは、ダダの詩人の誰よりも、彼のニヒルがきわだっていたからであつたと思う。

彼の英雄主義、自己顕示、それ自体として必ずしも気にならぬ傾向ではないが、テロリストのニヒリズムとして、認め得るように思える。さすがに大杉栄追悼の詩「杉よ！ 眼の男よ！」をもっとも形象化のしっかりした、情感をつくした一篇の詩として残し得たところに、中浜哲の詩人の実体が見出せるのではないか、彼の内実の謙虚が顔を出している。

注、『黒パン党宣言』は昭和の刊行であるが、その書かれた時期のために大正の章に入れる。

二つの『社会詩人詩集』

昭和三十五年四月の『書痴往来』巻末にある発禁本の番付では、東西の横綱以下十両まで併

わせて七十二枚のうち、東の十両筆頭には『日本社会詩人詩集』が付出されている。この番付のなかで詩集は児玉花外の『社会主義詩集』以下十三枚、とすればこの詩集も中々隅におけないということになる。

だがこの本はけっして社会主義の詩集ではない。その性格を見るためには「序」を要約的に引用すればよい。

「私達はここに相集ってこの詩集一卷をつくった。——これらの詩は社会と生活、思想と体験との上になった私達個々の心からの人々への捧物である。少くとも近代社会精神の一つのあらわれとしてこの詩集は深い意味がある。——しかもこれらの詩は勿論主義を一つにして生れたのではない。芸術は自由であり、私達個々は自由にその信ずるところに任かせてうたった。一九二〇、一二」

これこそデモクラシー、大正の民衆詩派の精神である。ここに集合した詩人は白鳥省吾、百田宗治、富田碎花、福田正夫、賀川豊彦、加藤一夫の六人、このうちはじめの四人は民衆詩派の詩人として大正詩壇をリードした人たちであった。賀川豊彦はキリスト教徒の人道主義的社会活動家、加藤一夫はアナキストに数えられていたこともある人だが、この顔ぶれは民衆詩派が左翼に近く立ったときの詩的極限といってもいいものである。

この詩集は、普通にいわれる発禁処分を受けたものではなく、幾篇かの作品に削除を命じ

て、応ずれば販売を許すという検閲者のいい分に応じたものである。そして次の五篇の詩

殺戮の殿堂——白鳥 省吾

騒擾の上に——百田 宗治

五月祭の朝——

〃

破壊——加藤 一夫

幸 福——

〃

がそのとき削除を命令されたものであった。この三詩人の五篇の詩は民衆詩派の思想的極限ともいえるべく、靖国神社とともにある古今の戦争記念品と武器の陳列所遊就館を「殺戮の殿堂」とうたい、反乱と蜂起と同盟罷工の群を描いた「騒擾の上に」や、現在の不合理を破壊しよう、我はユートピアならむ、ただ衝動に聴く男だと叫ぶ「破壊」など、大正の日本の圧制的な政治が許容する由もない内容であった。また「五月祭の朝」など、そのときから大方五十年をすぎて、なおメーデーをうたってこの詩を抜く強い作品はまだ現われぬといたいくらいのものである。

民衆詩派を、左翼はその精神をブチブルの甘さといい、芸術派はその詩形式を冗漫という。現在その評価はますます低い、日本の詩が新体詩から現代詩に脱皮する中間的存在として民衆詩派が果たした役割とそれに伴った努力は忘却してしまうわけにはいくまい。

この『社会詩人詩集』に結集した精神は、大正日本の民衆的不同調を語るものとして十分評価に値する。大正末昭和初めの詩的前衛たちは、民衆詩派の言葉と内容との詩的な地ならしの上に登場し得たものであった。当時「詩」をめぐる真向から彼等と対立した北原白秋らの芸術派的詩人よりも民衆詩派が現代詩に寄与したものははるかに大きい。

『日本社会詩人詩集』はその民衆詩派が残したもっとも良心的で実質的な仕事であった。

北原白秋と白鳥省吾の論争、そのふかい詩性の再吟味は現在といえども必要ではないと思う。そのとき民衆詩がよりどころとした「民衆」の概念は現代もまだ徹底して掘りつくされてはいない。

この詩集とほとんど同じ時に刊行されて、全くひとしい憂目に遭遇した詩集に『泰西社会詩人詩集』がある。この泰西という称呼にはいかにも大正らしさがあるが、これは『日本社会詩人詩集』の翻訳版ともいえるべく、訳出された詩は、当時わが民衆詩派がしきりと紹介した外国の民主々義詩人たちのものであった。エマーソン、ホイットマン、ヴェルハアラン、カーペンター、トラウベルら五人の詩人、彼らの実際はわが民衆詩派と必ずしもひとしいものではないが、あくまで民衆詩派、社会詩人として紹介されていたものである。

これらの二つの社会詩人詩集が出た大正十一年といえ、自由詩が詩壇の大勢を制していくらもたたず、わが詩史のうえに社会主義——プロレタリア詩の系譜も確立しておらず、前衛的

なダダ、未来派の詩が、地平線にかいま見えはじめた頃で、この時期を代表する者は未だ民衆詩派であった。

自由詩形とデモクラシーという新しい社会思潮に勇み立って活動した彼らは、その時期の前衛的存在でもあり、詩の大衆化には逸することのできない活動もした。『日本社会詩人詩集』と彼らの翻訳になる『泰西社会詩人詩集』がつづいて部分削除を命令され、発禁におびやかされたのは、民衆詩派が社会主義の活動に近く存在していると見えた、そのこととかかわりのあることであつた。

各翻訳の受持は次の通りである。

エマーソン	福田 正夫
ホイットマン	白鳥 省吾
ヴェルハアラン	百田 宗治
カーペンター	富田 碎花
カーペンター	福田 正夫
トラウベル	福田 正夫

(ヴェルハアランの翻訳者百田宗治は「注意」として特に「本訳は署名者自身に少し差障りがある、友人金子光晴君を煩わしてその部分の訳をやって貰った、一言付記しておく」と

かいている。金子はこの本の出た前年に第一回のヨーロッパ旅行から帰っていた。

私は、日本と泰西、この二つの社会詩人詩集が編まれた努力と、その二つともが発禁処分によつておびやかされたことに、今では考えられないほどの歴史のへだたりを思う。時代の示唆に富む重要な部分が削除されて、この詩集から日本の若い詩人が受けとるものは僅少であつたかと思うが、政治的イデオロギー以前の、健康な、自由への要望に立つ詩人的息吹きがわが左翼詩人たちに意外に少なかったことへの反省とともに、この詩集を回想するのである。